

資料

肯定性－否定性が異なる環境における 幼児の誤信念の理解と意図の帰属との関係

吉村 斉*

要約：本研究は、幼児を対象に、環境として自分に肯定的な思いや否定的な思いが生じると予想される場面において、他児の意図の帰属が誤信念の理解に応じてどのように異なるかを検討したものである。調査対象者は69名の幼稚園児（4歳児33名、5歳児36名）であった。調査は面接法で実施された。主な結果は以下の通りである。まず、調査対象者の誤信念得点が平均値より高い群を誤信念H群、低い群を誤信念L群に分類した。続いて、調査対象者の肯定的帰属得点が平均値より高い群を肯定的帰属H群、低い群を肯定的帰属L群に分類した。その結果、誤信念H群の中で肯定的帰属H群に属する対象者の否定的帰属得点は、肯定的帰属群L群に比べて有意に低かった。つまり、誤信念を正しく理解している幼児の中で肯定的帰属も適切に判断している幼児は、否定的帰属の判断も適切であることが示唆された。それゆえ、誤信念の理解が他者の意図の理解のあり方を規定することが考えられる。以上の結果より、他者理解における誤信念の重要性が確認されたといえる。

キーワード：誤信念、肯定的場面、否定的場面、意図、幼児

問 題

発達段階を問わず、自己否定や消極的な考えを原因に、集団不適応を招くことが社会問題となっている。それゆえ、子ども期からのレジリエンス（精神的回復力）の育成が緊急課題となっている。岩立（2007）によると、レジリエンスを育むためには「人と関わることは楽しい」と思えることが重要であるという。幼児期は、集団生活を通して怒りや葛藤を体験する機会が多い。それゆえ、自分の感情を統制して、他者との関係を維持したり立て直したりする社会的スキルの発達が求められる。その1つとして「他者の意図を理解する認知」が挙げられる。

他者の意図は必ずしも一律ではない。場の理論

（Lewin, 1951）で示されるように、人の行動は個人と環境の相互作用による影響を受ける。つまり、個人の発達だけでなく、環境の違いによって行動や思考が規定されるのである。それゆえ、他者理解の発達を考える場合、その理解に影響を及ぼす環境か否かも考慮しなければならない。

Sabbagh, Xu, Carlson, Moses & Lee（2006）によると、他者の心的状態を推測するためには、自分の知識や信念を制御することが前提になる。例えば、自分を肯定的な感情にするものもあれば、逆に否定的な感情にするものもある。とりわけ、否定的な結果が生じる行為には、非意図的な行為にも意図を帰属する方向に信念の帰属が歪められるという（鈴木, 2014）。本来、他者理解は肯定

*高知学園短期大学 幼児保育学科 Email: hyoshimura@kochi-gc.ac.jp

的に帰属することと否定的に帰属することが整合することで成立すると考えられる。その際、誤信念の発達は帰属の肯定性や否定性と相互に影響しあっていると考えて支障はないだろう。その判断を適切に行うためには、瞬時に自分に対する影響や自分が味わう気持ちを推測して、感情を統制することが必要になる。つまり、自分自身へもたらされる結果を想像しながら、他児の意図を推測しなければならない。その際、他児の意図に対する帰属の肯定性と否定性が、誤信念の理解の発達に影響を及ぼす環境的要因に該当すると思われる。

従来の誤信念に関する研究では、否定的な結果を引き起こす場面を中心に検討されてきた。敵意帰属バイアスの発達を検討したDodge (2006)によると、養育者との愛着関係のあり方や周囲の身近な大人の行為による影響など、多様な要因の影響が指摘されている。他方、肯定が予想される場面では、問題行動として捉える必要性が生じない。それゆえ、肯定的な場面に比べると、否定的な場面は客観的、可逆的に思考する必要性が高く、その結果として意図の理解との関係が検討されてきたと考えられる。すなわち、肯定的な場面における意図の理解については、今後さらなる検討を重ねる必要があるといえる。

これまで、他者の意図に推論に関する研究においては、誤信念の理解との関連性を中心に検討が進められてきた(子安, 2013)。その中で、鈴木(2014)は、肯定的な結果と否定的な結果が生じる行為に対する幼児期の認知に着目して、誤信念の推論過程を検討した。その結果、肯定的、否定的いずれの場面においても、誤信念を理解している子どもほど意図に注目しやすいことを見出した。つまり、相手の誤信念に気づくことが肯定的か否定的かを適切に判断し、それに適した表象に基づいて意図を正しく帰属することにつながると推察される。

以上のことから、肯定的に帰属する認知と否定的に帰属する認知との関係は、誤信念の理解に規定されることが予想される。しかし、他者理解に基づく適切な対人関係の獲得過程については明確

な知見がまだ少ない(溝川, 2016)。いいかえれば、これらの関係が解明されることによって、他者の行為に対する善悪の判断を他者の意図に基づいて考えられるよう幼児を支援することが実現すると期待される。さらに、子ども同士のいざこざでは、お互いの信念のずれを埋めるための支援方法を考える上で意義がある。そこで、本研究では、環境の違いとして肯定性と否定性を取り上げ、幼児を対象に「肯定的な思いが予想されそうな場面における他者の意図への肯定的な帰属の程度(以下、肯定的帰属)」と「否定的な思いが予想されそうな場面における他者の意図への否定的な帰属の程度(以下、否定的帰属)」との関係が、誤信念の理解に応じてどのように異なるかを検討する。

まず、否定的帰属と肯定的帰属との関係について検討する。Knobe (2005) と Knobe & Burra (2006)によると、否定的な行為は肯定的な行為に比べて意図的であると判断されやすい。すなわち、否定的な結果が生じる過程で情動的判断が活性化することから、正しい認知的判断が妨げられることを意味している(鈴木, 2016)。それゆえ、肯定的帰属に比べると、否定的帰属の程度は高くなることが予想される。

ただし、意図の理解は信念の理解に支えられている(鈴木, 2013)。また、Maehara & Saito (2013)によれば、他者の誤信念を正しく理解するためには、「自分の知っている現在の事実」と切り離して思考する力が求められる。それゆえ、誤信念の理解を有する子どもは、事実を客観的に捉え、可逆的に思考し、他者の意図を理解することが可能になると予想される。したがって、誤信念を正しく理解できる子どもの場合、肯定的帰属を適切に判断することができていれば、否定的帰属も適切に判断することができると予測される。他方、誤信念の理解が十分でない場合、意図の帰属は混乱したり整合性を欠いたりすることとなり、肯定的帰属と否定的帰属の間に一貫した関係は見られないと予測される。

一般に、誤信念の理解は年齢が上がるにつれて正答率が上昇する。ただし、誰かが非意図的に被

害を受ける道徳的誤信念課題の場合、被害を受けない標準的誤信念課題よりも難易度が上昇する (Killen, Mulvey, Richardson, Jampol & Woodward, 2011)。それゆえ、誤信念の理解は、年齢による影響よりも、帰属の肯定性－否定性に左右されることが推察される。本研究では、今後の幼児期における誤信念の理解に応じた肯定的帰属と否定的帰属との関係を探る手がかりを得るため、難易度の高い道徳的誤信念課題に基づいた内容で検討を進める。

ところで、否定的帰属に比べると、肯定的帰属に関する知見が少ないことから、幼児の誤信念との関係に関する仮説を設定するには理論的根拠が乏しい部分もある。そこで、まずは肯定的帰属と否定的帰属の年児差を探索的に比較し、有意差の有無に応じて年児を分析対象にするか否かを判断する。以上のことから、本研究では仮説を設定せず、予測を確認して、今後検討すべき課題を提示する試験的分析と位置づける。

方 法

調査対象者

言語的説明による調査への対応を考慮し、本研究では、A 県内私立幼稚園4歳児クラス33名、5歳児クラス36名、合計69名 (男児32名、女児37名) を対象とした。

信念－願望推論過程に関する質問

信念－願望推論過程の発達を調べるため、平素の幼稚園での活動の様子を反映させながら、誤信念を取り上げた Wimmer & Perner (1983) の課題を参考に、道徳的誤信念課題の内容に関する 1～3 の物語を作成した。次に、物語の様子を示し

た図 (図1) を提示しながら誤信念を測定するための質問を行った。なお、日頃の遊びで使用する人形が男女で異なることから、人形に関する場面では男女で人形を入れ替えて同様の展開と思われる質問を行った。場面の物語中の人物 A, B には所属クラスにいない架空の名前をあてはめて説明した。また、予め園児が好むキャラクターや遊びの種類を担任教師に確認して質問の作成を行った。

1. 人形の場面

男児用で説明した内容は以下の通りである。

A ちゃんは、遊んでいたジュウオージャーの人形を黒い箱にしまって部屋を出ました。

A ちゃんがいないうちに、B ちゃんがやってきて、黒い箱からジュウオージャーの人形を取り出し遊び始めました。

B ちゃんはジュウオージャーの人形で遊んだ後、その人形を白い箱に片づけ、プリキュアの人形を黒い箱に片づけて部屋を出ていきました。

その後、A ちゃんがジュウオージャーの人形で遊ぼうと思い、再び部屋に入ってきました。

なお、女児用では「プリキュア」と「ジュウオージャー」を入れ替えた場面を作成し、同様の質問を行った。

①信念の質問

A ちゃんは、黒い箱にどんな人形が入っていると思ったかを質問し、「プリキュア」「ジュウオージャー」から選択させた。なお、明らかに理解不足と思われる回答や無反応が続く場合は「その他」に分類し、分析の対象から除外することとした。また、「プリキュア」と答えた場合は、それを記録した上で、物語の内容を再度説明し、プリキュ

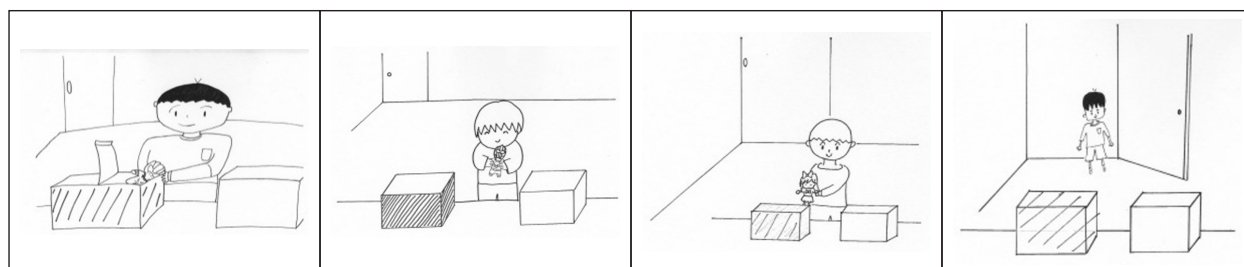


図1 人形の場面で用いた絵 (男児用)

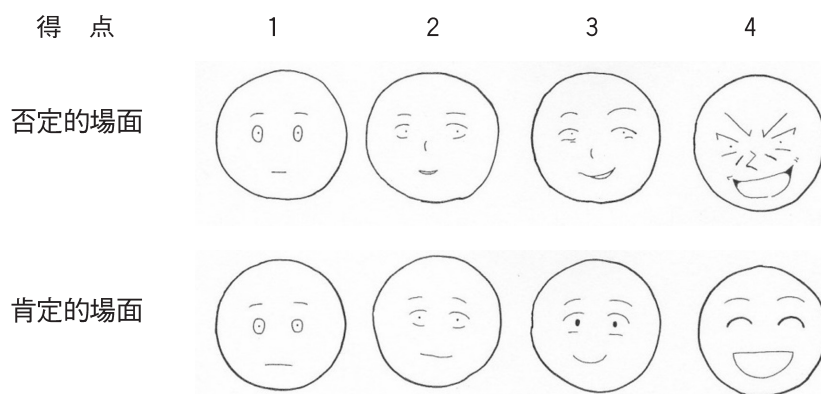


図2 否定的および肯定的場面で用いた意図の帰属に関する絵

アを黒い箱に片づけている時にAちゃんがいないことを確認し、実はジュウオージャーの人形が入ったままであったことを伝え、その理解を確認した。女兒の場合は、逆の手続きで説明を行った。

②否定的場面における意図の帰属の測定

否定的と帰属しやすい場面における相手の意図をどのように帰属するかを測定するため、以下の質問を行い、4件法で得点化を行った。測定にあたっては、吉村（2003）を参考に、否定的意図の程度を測定する絵を作成し（図2）、その絵を提示しながら選択させた。

Aちゃんが黒い箱を開けると、プリキュアの人形が入っていて、とても困りました。Bちゃんは、どれくらい意地悪をしようと思って、プリキュアの人形を黒い箱に入れたのでしょうか。

③肯定的場面における意図の帰属の測定

肯定的と帰属しやすい場面における相手の意図をどのように帰属するかを測定するため、否定的意図の図を参照して、肯定的意図の程度を測定する絵を作成した（図2）。その絵を提示しながら、以下の質問を行い、4件法で得点化を行った。

Aちゃんが黒い箱を開けると、プリキュアの人形が入っていました。プリキュアの人形も大好きだったので、とても喜びました。Bちゃんは、どれくらい喜んでもらおうと思って、プリキュアの人形を黒い箱に入れたのでしょうか。

2. ボールの場面

Aちゃんは、遊んでいたサッカーボールを黒い

箱にしまって部屋を出ました。

Aちゃんがない間に、Bちゃんがやってきて、黒い箱からサッカーボールを取り出し遊び始めました。

Bちゃんはサッカーボールで遊んだ後、そのボールを白い箱に片づけ、小さなボールを黒い箱に片づけて部屋を出ていきました。

その後、Aちゃんがサッカーボールで遊ぼうと思い、再び部屋に入ってきました。

①誤信念の質問

Aちゃんは、黒い箱にどんなボールが入っていると思ったかを質問し、「小さなボール」「サッカーボール」から選択させた。なお、「小さなボール」と答えた場合は、それを記録した上で、小さなボールを黒い箱に片づけている時にAちゃんがいなかったことを確認し、サッカーボールが入ったままであったことを伝えた。

②否定的場面における意図の帰属の測定

意図の程度を測定する絵を提示しながら以下の質問をし、4件法で得点化を行った。

Aちゃんが黒い箱を開けると、サッカーをして遊びたかったのに小さなボールが入っていて、とても困りました。Bちゃんは、どれくらい意地悪をしようと思って、小さなボールを黒い箱に入れたのでしょうか。

③肯定的場面における意図の帰属の測定

肯定的と帰属しやすい場面における相手の意図をどのように帰属するかを測定するため、以下の質問を行い、意図の程度を測定する絵を提示しな

がら4件法で得点化を行った。

Aちゃんが黒い箱を開けると、小さなボールが入っていました。ボール投げもしたかったので、とても喜びました。Bちゃんは、どれくらい喜んでもらおうと思って、小さなボールを黒い箱に入れたのでしょうか。

3. 絵本の場面

Aちゃんは、大好きな楽しいお話のあるアンパンマンの絵本を黒い箱にしまって部屋を出ました。

Aちゃんがいないうちに、Bちゃんがやってきて、黒い箱から絵本を取り出し読み始めました。

Bちゃんは、楽しいお話があるアンパンマンの絵本を読んだ後、その絵本を白い箱に片づけ、表紙がよく似た別のアンパンマンの絵本を黒い箱に片づけて部屋を出ていきました。

その後、楽しいお話のあるアンパンマンの絵本をまた読もうと思い、再び部屋に入ってきました。

①誤信念の質問

Aちゃんは、黒い箱にどんな絵本が入っていると思ったかを質問し、「別のアンパンマンの絵本」「楽しいお話のあるアンパンマンの絵本」から選択させた。なお、「別のアンパンマンの絵本」と答えた場合は、それを記録した上で、別のアンパンマンの絵本を黒い箱に片づけている時にAちゃんがいなかったことを確認し、楽しいお話のあるアンパンマンの絵本が入ったままであったことを伝えた。

②否定的場面における意図の帰属の測定

意図の程度を測定する絵を提示しながら以下の質問をし、4件法で得点化を行った。

Aちゃんが黒い箱を開けると、楽しいお話のあるアンパンマンの絵本を読みたかったのに、別のアンパンマンお話の絵本が入っていて、とても困りました。Bちゃんは、どれくらい意地悪をしようと思って、別のアンパンマンの絵本を黒い箱に入れたのでしょうか。

③肯定的場面における意図の帰属の測定

肯定的と帰属しやすい場面における相手の意図をどのように帰属するかを測定するため、以下の

質問を行い、意図の程度を測定する絵を提示しながら4件法で得点化を行った。

Aちゃんが黒い箱を開けると、別のアンパンマンの絵本が入っていました。知らないお話にも興味を持っていたので、とても喜びました。Bちゃんは、どれくらい喜んでもらおうと思って、別のアンパンマンの絵本を黒い箱に入れたのでしょうか。

調査の実施

2016年11月下旬から12月上旬にかけて、個別面接法による調査を実施した。調査は幼稚園のホールで行われた。なお、本研究は平成28年度高知学園短期大学研究倫理審査委員会において、研究目的と計画およびインフォームド・コンセントの手続きなどに関する審査を受け、その承認を得て実施された（承認番号第30号）。

結 果

各変数の得点化

1. 誤信念の得点化

3つの場面の誤信念について、正しく選択していれば2点、誤って選択していれば1点とし、場面あたりの平均点を算出した。

2. 否定的帰属の得点化

否定的場面における意図の評定について、4件法による得点に基づき場面あたりの平均点を算出した。すなわち、平均値が高いほど、他児の意図を「意地悪」と帰属しやすいことを意味する。

3. 肯定的帰属の得点化

肯定的場面における意図の評定について4件法による得点に基づき場面あたりの平均値を算出した。すなわち、平均値が高いほど、他児の意図を「喜んでもらおう」と帰属しやすいことを意味する。

対象者の群化

1. 誤信念の理解の群化

各児の誤信念得点が全体の平均 ($M=1.45$, $SD=0.40$, $N=69$) より高い場合は「誤信念H群 ($N=28$)」、逆に低い場合は「誤信念L群 ($N=41$)」に分類した。前者は「他児の誤信念を正しく理解しやすい」と考えられる群、後者は「他児の誤信

念を誤って捉えやすい」と考えられる群を意味している。

2. 肯定的帰属の群化

各児の肯定的帰属得点が全体の平均値 ($M=3.52$, $SD=0.56$, $N=69$) より高い場合は「肯定 H 群 ($N=42$)」, 逆に低い場合は「肯定 L 群 ($N=27$)」に分類した。前者は「他児の意図を肯定的に捉えやすい」と考えられる群, 後者は「他児の意図を肯定的に捉えるとはいい難い」と考えられる群を意味している。

年児差の有無の確認

誤信念の理解, 肯定的帰属, 否定的帰属各得点が 4 歳児と 5 歳児で異なるか否かを確認するため t 検定を行った。その結果, いずれにおいても有意差は認められなかった。($t(67)=19$, $t(67)=51$, $t(67)=1.13$, $n.s.$)。したがって, 以下では 4 歳児と 5 歳児を込みにして分析を進めることとす

る。

否定的帰属における誤信念の理解と肯定的帰属との関係

否定的帰属得点を従属変数, 誤信念の理解, 肯定的帰属, 性別を独立変数とした三要因分散分析を行った (多重比較は有意水準を $\alpha=.05$ とした Tukey の HSD 法を用いた)。各変数における否定的帰属得点の平均値と標準偏差は表 1 に示した。

分散分析の結果, 性別の主効果が認められた ($F(1,61)=5.54$, $p<.05$, $MSe=.65$)。多重比較の結果, 男児が女児に比べて意地悪と帰属しやすかった。さらに, 誤信念の理解と肯定的帰属との交互作用も認められた ($F(1,61)=4.50$, $p<.05$, 図 3)。単純主効果の検定を行うと, 誤信念 H 群において肯定的帰属 H 群の否定的帰属得点が肯定的帰属 L 群より低かった ($F(1,61)=3.55$)。すなわち, 意地悪と捉えていないことが

表 1 性別に見た誤信念と肯定的帰属各群における否定的帰属得点

性 別 誤信念 肯定的帰属 N	男児				女児			
	H		L		H		L	
	H	L	H	L	H	L	H	L
	11	3	8	10	10	4	13	10
否定的帰属	2.64	3.22	3.00	2.77	2.17	2.92	2.38	2.10
	0.69	0.38	0.82	0.85	0.82	0.88	0.96	0.67

N : 人数、上段: 平均値、下段: 標準偏差

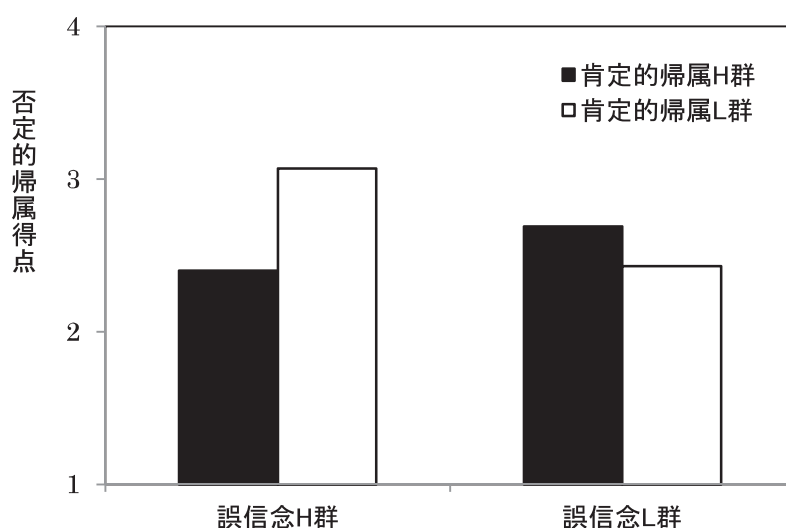


図 3 否定的帰属における誤信念の理解と肯定的帰属との関係

示唆された。なお、誤信念 L 群で有意差は認められなかった ($F(1,61)=1.03, n.s.$)。

考 察

本研究では、幼児を対象に、肯定的帰属と否定的帰属との関係が誤信念の理解に応じて異なるか否かを検討した。以下では得られた結果に基づいて考察を進める。

本研究の予測は、誤信念を正しく理解している幼児において、肯定的帰属が適切な幼児は、否定的帰属も適切に判断していることであった。このことは、否定的帰属における誤信念と肯定的帰属との交互作用で考察することができる。分析の結果、全般的に男児の否定的帰属得点が女児に比べて高い中、誤信念と肯定的帰属の交互作用が認められた。すなわち、誤信念を正しく理解しやすい誤信念 H 群の幼児において、他児の意図を「喜ばせよう」と思いやすい肯定的帰属 H 群の幼児ほど、自分が困るような場面であっても他児の意図を「意地悪」ではないと思いがやすいことが示唆された。否定的帰属の物語では、必ずしも意地悪をしようと思って場所を移動させたわけではない内容である。それゆえ、否定的帰属得点の低さが帰属の適切さを反映することとなる。したがって、本研究の予測は支持が得られたといえる。

また、これに関連して、誤信念の理解が乏しい幼児の場合、肯定的帰属と否定的帰属との間に有意差は認められないことも予測された。分析の結果、否定的帰属における誤信念 L 群で肯定的帰属群の一貫した関係は認められなかった。すなわち、この予測も支持する結果であったといえる。

このように、誤信念の理解が他者の意図の理解のあり方を規定するとともに、意図の理解の発達における誤信念の重要性が確認された。例えば、女児に比べると男児は、いざこざを許容されやすいと大人が捉えることが、既に多くの先行研究で示唆されている。その影響が本研究で示された性差に関連すると考えられる。逆に、他児の意図を「喜ばせよう」と思うわけではない子どもほど意図を「意地悪」と思いやすいことも示唆される。

このような関係は、誤信念を正しく理解していない幼児では見られなかった。つまり、他児の意図を理解する際、肯定的場面と否定的場面で整合しているか否かは誤信念の理解に規定されることとなる。

以上のことから、本研究では、他者理解における誤信念の重要性が示唆されたといえる。例えば、幼児同士のトラブルへ介入する際、お互いに誤信念の捉え方を聴き、そのずれの解消を目指した言葉がけを工夫する上で有益になると考えられる。さらに、その積み重ねによって幼児同士が自律的な解決を目指して自己主張ができるようになると期待される。

社会性の発達において、幼児期は重要な時期である。鈴木 (2013) も述べるように、意図の理解は信念の理解に支えられている。幼児期中期には、友達の人格特性について語ることも現れるなど (坂上, 2012)、幼児期におけるコミュニケーション能力と他者理解の発達は著しいものがある。この時期は園生活における友達や仲間との相互交渉を体験することが、他者理解の発達を支える要因になっていることを改めて確認できたといえる。

多様な仲間交渉の経験が、相手のことを考える機会となり、脱中心化と相まって他者理解が発達することは当然である。その中でも、いざこざと仲直りの反復がレジリエンスの発達に重要であることが推察される。そのレジリエンスを支える要因としても、また他者を理解する認知が含まれるのであろう。この相互作用の様相を解明する糸口を得るため、本研究では環境として肯定的帰属と否定的帰属を要する場面を取り上げ、誤信念の理解に応じた違いを検討した。その結果、誤信念の理解が他者理解の発達を支える要因の 1 つであることが確認された。

ただし、本研究は条件を統制して実施した研究ではない。実際に人数の偏りが見られた。この偏りが要因間の因果関係を示唆するものかは検討の余地が残されている。本研究では分析の対象としなかった年児についても、条件を統制した上で再検討することが求められる。また、仮説ではなく、

結果の予測を基に検討が進められたことから、理論的根拠の追究についても課題が残された。したがって、今後は、肯定的帰属の発達に関する知見を積み重ね、肯定的帰属と否定的帰属との関係を規定する信念の理解の発達を解明することが必要である。その上で、子ども期からのレジリエンスの発達と集団生活との関係を解明する研究へ発展させることが望まれる。

付 記

本研究にご協力くださいました幼稚園の園児と保護者の皆様、先生方には改めて深く謝意を表します。また、本研究は、調査実施当時、高知学園短期大学幼児保育学科2年に在籍していた上田慶次さん、佐賀野真由さん、佐藤結菜さん、谷口泉水さん、樋口愛里菜さんのご協力を得て準備・実施されました。深く謝意を表します。

引用文献

- Dodge, K. A. (2006). Translational science in action: Hostile attributional style and the development of aggressive behavior problems. *Development and Psychology*, **18**, 791-814.
- 岩立京子. (2007). 幼児教育の現代的課題と領域「人間関係」 無藤 隆 (監)・岩立京子 (編). *事例で学ぶ保育内容 領域人間関係* 東京: 萌文書林 Pp.173-185.
- Killen, M., Mulvey, K. L., Richardson, C., Jampol, N., & Woodward, A. (2011). The accidental transgressor: Morally-relevant theory of mind. *Cognition*, **119**, 197-215.
- Knobe, J. (2005). Theory of mind and moral cognition: Exploring the connection. *Trends in Cognitive Science*, **9**, 357-359.
- Knobe, J., & Burra, A. (2006). The folk concept of intention and intentional action: A cross-cultural study. *Journal of Cognition and Culture*, **6**, 113-132.
- 子安増生. (2013). いまなぜ「心の理論」を学ぶのか 発達, **135**, ミネルヴァ書房, 2-8.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science: selected theoretical papers*. New York: Harper & Brothers. (レヴィン, K., 猪股佐登留 (訳). (1981). *社会科学における場の理論: 増補版* 東京: 誠信書房 Pp.15-42.)
- Maehara, Y., & Saito, S. (2013). Cognitive load on working memory both encourages and discourages reasoning bias regarding the mental states of others. *Australian Journal of Psychology*, **65**, 163-171.
- 溝川 藍. (2016). 「心の理論」と感情理解: 子どものコミュニケーションを支える心の発達 子安増生 (編). 「心の理論」から学ぶ発達の基礎: 教育・保育・自閉症理解への道 京都: ミネルヴァ書房 Pp.107-118.
- Sabbagh, M. A., Xu, F., F., Carlson, S. M., Moses, L. J., & Lee, K. (2006). The development of executive functioning and theory of mind: A comparison of Chinese and US preschoolers. *Psychological Science*, **17**, 74-81.
- 坂上裕子. (2012). 幼児は自他に関する理解をどのように構築するのか: 一児の1歳8ヵ月から5歳3ヵ月までの発話記録から 乳幼児教育学研究, **21**, 29-45.
- 鈴木亜由美. (2013). 幼児の意図理解と道德判断における意図情報の利用 心理学評論, **56**, 474-488.
- 鈴木亜由美. (2014). 幼児の道德的文脈における誤信念の理解 発達心理学研究, **25**, 379-386.
- 鈴木亜由美. (2016). 対人葛藤解決と心の理論 子安増生・郷式徹 (編). *心の理論: 第2世代の研究へ* 東京: 新曜社 Pp.119-131.
- Wimmer, H., & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, **13**, 103-128.
- 吉村 斉. (2003). 子育てに悩んだ時の心理学 東京: 岩崎電子出版 p.88.

受付日: 平成29年10月5日

受理日: 平成29年11月21日

Data

The Relationships between Young Children's Understanding of False Beliefs and Their Attribution of Others' Intention according to Affirmative or Negative Environments

Hitoshi YOSHIMURA*

Abstract: The present study examines whether young children's attribution of others' intention in the affirmative situations affects the relationships between their understanding of false beliefs and their attribution of others' intention in negative situations. Participants were 69 kindergarteners (33 4-year old and 36 5-year old children). The researches were conducted by methods of interview, and the following significant results were obtained: First, children whose false beliefs scores were higher than the mean score belonged to "false belief H-group", and those whose false beliefs scores were lower belonged to "false belief L-group". As a result, children belonging to the false belief H-group whose affirmative scores were higher than the mean scores understand others' intention more correctly than those whose affirmative scores were lower. On the other hand, children belonging to the false belief L-group were not significantly different according to their attribution of others' intention. Consequently, it seems reasonable to conclude that the development of young children's understanding of false beliefs also has a great influence on their understanding of others' intention in early childhood.

Key words: False belief, affirmative situation, negative situation, intention, young children

*Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care, Email: hyoshimura@kochi-gc.ac.jp

